

震災教材 初の出前授業

宮古高定時制講師の小笠原潤さん(66)は、教え子の高校生が東日本大震災について書いた小論文を「教材」とする授業に取り組んでいる。文章を朗読して震災を身近に感じてもらい、自分事として捉えるためのワークショップも実施。災禍の記憶がない世代が増える中、初めての出前授業を久慈市で行い、思いをつなぐ決意を強くした。

宮古高定時制講師・小笠原潤さん



震災を経験した高校生の思いをつなごうと授業を行う小笠原潤さん

久慈翔北で思いつなぐ

同市の久慈翔北高(村山薫美校長、生徒428人)門前校舎で5月27日に行われた初の出前授業。同校の19人のほか、県の交流事業の一環で北校高(山影稔男校長、同312人)の11人も参加した。



震災を経験した高校生が書いた小論文を朗読する生徒

教え子の文章朗読通して

外の災害や被災後の対応を説明した後、九つの小論文を紹介した。「家族を2人亡くし、ずっと帰りを待っていた」。生徒たちは同世代がつづった言葉をかみしめながら朗読した。

久慈翔北高2年の久慈未紘さんは「朗読して(体験した高校生の)思いが感じ取れた。震災を忘れず、伝え続けることの大切さを再確認した」とうなずいた。ワークシヨップでは、両校の生徒たちが能登地震も踏まえ「できること」を考

次への備え

震災時、宮古高に勤務していた小笠原さん。その後、も沿岸の高校で働き、教える。教える側も世代交代する子に震災や復興について小論文を書いてもらった。発災から10年以上が経過して

(平野祥子)